保育環境としての施設・設備に関する一考察

～大正期の幼稚園を中心に～

② 東京女子高等師範学校附属幼稚園および旭東尋常小学校附属幼稚園の保育室に見られた教育実践

永井理恵子

はじめに

本報告は、幼稚園教育・保育所保育の諸環境の中から特に幼稚園舎およびその室内環境設定に焦点をあて、教育実践との関連に注目して考究を進めながら我が国におけるそれらの歴史的背景の一端を辿ることを目的とした考察である。本考察は全三回にわたっておこなうものであり、本報告はその第二回報告である（本考察全体の目的・構成については、第一回報告（11月号）を参照して頂きたい）。

今回の報告では、大正期における幼稚園の保育室の室内環境設定と、教育実践の様子とを見る。事例とする幼稚園は、東京と岡山に設立された幼稚園である。東京の幼稚園は第一回報告でも取り上げた東京女子師範学校附属幼稚園であり、岡山の幼稚園は岡山市内に明治初期に設立された旭東尋常小学校附属幼稚園である。東京女子師範学校附属幼稚園の明治期の教育内容・方法については第一回報告を参照頂きたい。旭東尋常小学校附属幼稚園の設立については本報告で後述する。

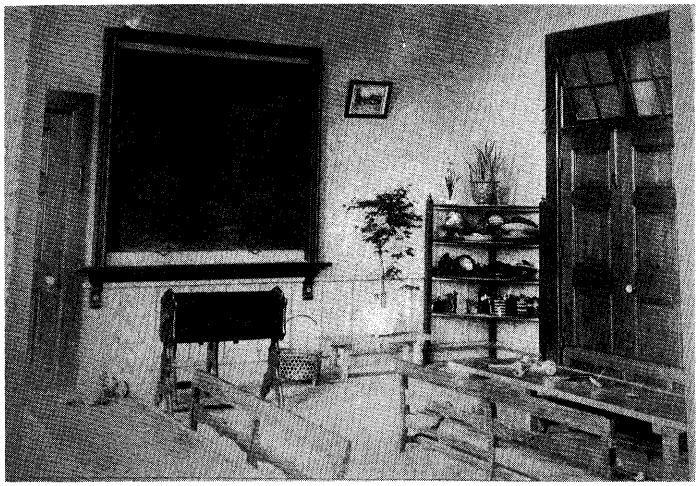
一．東京女子師範学校附属幼稚園における大正期の実践の展開（保育室における活動）

一では、大正期の東京女子師範学校附属幼稚園における保育室の室内環境設定と、保育活動の展開の様子とを、大正十一（一九二二）年度に撮影された二枚の写真をもとに考察する。

まず写真①を見よう。写真むかって右の扉は廊下に通じる扉であり、左の扉は隣室に通じる扉である。廊下への扉の上部には換気窓が設けられている。また、室前方の壁面には上げ下げ式の黒板がとりつけられており、その高さからみてこの黒板は、当初は保姆が使用するためにとりつけられたと考えられる。なお、大正十二（一九二三）年まで使用されていた園舎は明治十九（一八八六）年に建てられた園舎であるから、この写真①は第一回報告中の図③に示した園舎と同一である。

室内には幼児用の机と椅子を始めとして、黒板前に置かれている鍵盤楽器・柄つきの籠・盆栽・三角棚・その上に置かれた植木などがある。これらのものは第一回報告で示した図④に描かれているそれらと同一の形状をしており、両者を照合するとこの幼稚園では明治中期に使

▼写真①　東京女子師範学校附属幼稚園保育室内部
（大正11年撮影）



用していたものを大正末期まで大切に使用していたことがわかる。ここで特に注目したいのは、幼児用の机と椅子の配置である。机は図④に描かれていた二人用の恩物机を使用していることに変化はないが、机は黒板のある方向に前向きに並べられるのではなく、横向きにつなげて並べられ、二人用の椅子が横向きに配置されている。この新しい並べ方では、幼児は教師と対面して他の幼児の背中を見て座るのではなく、幼児同士が対面して座ることになる。このように大正十一年の東京女子師範学校附属幼稚園では、明治期の同幼稚園で実践されていた、当時の小学校の教場風の机椅子の配置をとりやめていたのである。

写真①に見られるような幼児同士が対面する着席方法は、今日の幼稚園・保育所においては一般的であり、特に目新しい方法ではないだろう。しかし大正期の幼稚園において幼児対面式の着席方法がとられるに至った背後には、教場式着席方法に対する幼児教育関係者らの問題意識の昂揚と、現場の保姆らの積極的な努力とがあった。

机椅子配置についての主張を記録する史料は、明治三八（一九〇五）年十二月発刊の雑誌『婦人と子ども』（第5巻第12号）に掲載された東基吉の談話記録「幼稚園幼児の机とその排べ方」が最も古い。当時、東は東京女子師範学校附属幼稚園の主事（今日の園長）を補佐する職である幼稚園批評掛を務めていた人物であった。この談話において東は図④に示されているような机椅子の配置の問題点について、室の雰囲気が教場的になること、保育が一斉的になること、室の空間が机椅子で占領されてしまうことの三点を指摘した。そしてその改善策として、八人で一台の机に向かって座るように配置することを挙げ、このような新しい着席方法をとるのに適した机として八人が共用できる大型の机が望ましいと述べた。

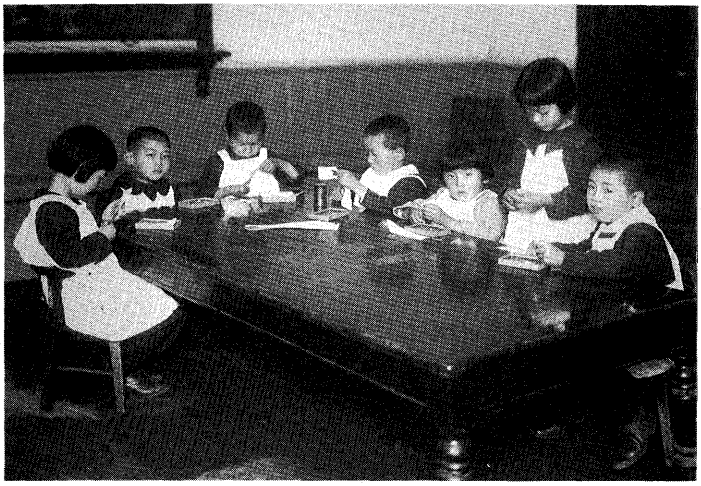
この東の談話記録の発表から七年後の明治四五（一九一二）年の春に、新しい机椅子の配置と新しい形状の机の導入が、幼稚園の現場においておこなわれたとの記録

がある。その幼稚園は当時、京阪神連合保育会所属神戸保育会で中心的立場にあった神戸市立神戸幼稚園であった。神戸幼稚園は大型の半円形の机を二台導入し、この机の使用状況はその実状を参観した倉橋惣三の小論「保育上の新しい試み　神戸幼稚園の大円形机」（明治四五年十二月発行『婦人と子ども』第12巻第12号所収）に発表された。

幼児教育界におけるこのような新しい発想と試みを経て、東京女子師範学校附属幼稚園の机椅子の配置方法も、写真①に示されたような方法に変容した。そして机も新しいものが購入されたことが、次に示す写真②からわかる。

この写真②も写真①と同様に大正十一年に撮影されたものであるが、室内の状況から見て写真①とは異なる室であると考えられる。七人の幼児が、紙剪り・珠繋ぎなど幾つかの活動を、ひとつの大きな机に向かっておこなっている。この写真は東京女子師範学校附属幼稚園においても、大正末期にはこのような自由な着席方法がとられるようになり、それに伴って机の形状も変容していたことを示している。

▼写真②　東京女子師範学校附属幼稚園保育室における活動（大正11年撮影）



ところで先の神戸幼稚園における大円形机の導入のように、大正期になると全国各地の幼稚園において新しい教育内容・方法の研究開発・導入が積極的におこなわれるようになった。東京女子師範学校附属幼稚園における教育内容・方法を他の幼稚園が追従的に模倣するに留まっていた明治時代とは異なり、各幼稚園が独自に研究したり、地域で研究グループをつくって学び合ったりしながら、その幼稚園独自の教育実践のありかたを探求する時代となった。次の二と三では、東京女子師範学校附属幼稚園の教育内容・方法に学びつつも、独自性を生かした実践をおこなっていた幼稚園のひとつの事例を見ることにする。

二、旭東尋常小学校附属幼稚園の歴史と、大正期の園舎

本考察でこの幼稚園を事例のひとつとして選択したのは、その大正期において使用していた園舎の形状や、教育実践の方法が非常に特徴的であったためである。二ではこの幼稚園の設立の背景と、大正期に使用した園舎の形状について簡単にまとめておく。

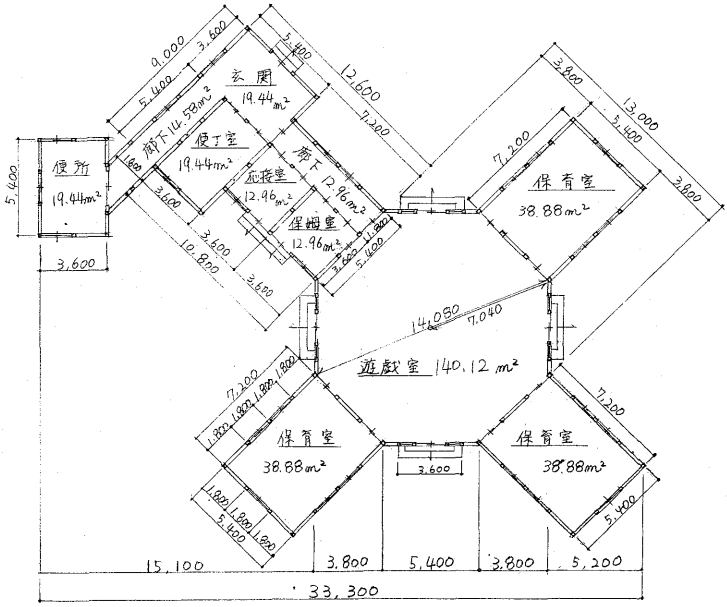
旭東尋常小学校附属幼稚園は、現・岡山市立旭東幼稚園の前身である。それは明治十八（一八八五）年四月に、岡山県師範学校附属小学校訓導の新藤貞範が寺の境内を借り、無資格者を保姆として開園した私立幼稚園であった。明治期のこの幼稚園は幾度も存続の危機にさらされ、場所も転々と移ったのだが、明治三九（一九〇六）年に旭東小学校が新校舎を建てる際に、同敷地内に同設計者の手によって、幼稚園のための建築が建てられることになった。

明治四一（一九〇八）年七月に新園舎において開園式をおこなった時、園長には小学校長が就任し、五名の保姆は全て有資格者であった。保姆のうち二名は岡山県師範学校が明治中期に県下に招いた東京女子師範学校卒業の保姆によって岡山県で養成された人物であった。

岡山県は明治四〇年代に入り、更に二名の東京女子師範学校卒業の保姆を招いた。そのひとりは明治四一年四

月に岡山県師範学校附属幼稚園主任として招かれ、もうひとりは明治四二年三月に、新園舎に移って一年も経たない旭東尋常小学校附属幼稚園に主任保姆として就任したのであった。この人は折井彌留枝という人物で、大正期には市内全市立幼稚園園長を兼任して多忙な日々を過ごした。旭東尋常小学校附属幼稚園は大正期をとおして、この折井の指導のもとで新しい教育実践にとりくんでいったのである。

ここで、大正期の実践に使用された園舎の平面計画を示す。図⑤はその平面図である。中央に八角形の遊戯室が配置され、三方に保育室が設けられている。北西の一辺には保姆室などの、大人が使用する室が配置されている。遊戯室からは、隣室に接続していない辺から園庭へ出られるが、保育室からは出られない。この園舎の室配置の特徴は、中央に八角形の遊戯室を配置するという、幼稚園舎には初めて試みられた全体計画と、保育室の向きが全て異なっており均一の採光がおこなわれないという点である。



◀図⑤ 旭東尋常小学校附属幼稚園平面図

三、旭東尋常小学校附属幼稚園における大正期の実践の展開（保育室における活動）

続いてこの独特な園舎内部の保育室の環境の設定と、活動の様子について見てみよう。

次に示す写真③は、保育室内部における机椅子の配置を示すもので、大正五年に撮影されたものである。室内には、写真の左右と中央奥の三方から陽が射している。窓の隅に三角棚がひとつ設置してある他には何もなく、室内装飾もない。

ここでもまた、机椅子の配置方法とそれらの形状に注目してみよう。机は中心角90度の扇形で、それが四台設置してある。この机は、組み合わせると大円形机になるが、この写真③では四台に分けて使用している。椅子は一人用で、23人の幼児が、5人ないし6人ずつ一台の机に向かって座っている。

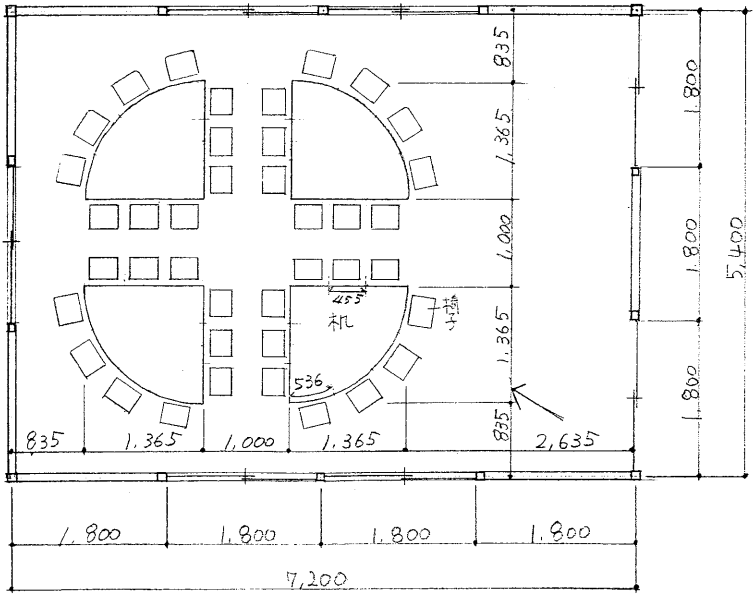
この机の形は当時非常に珍しく革新的な形であった。この形がどのようにして考察されたのかを辿ってみると、そこに倉橋惣三の姿が見えてくる。

円形を二分した半円机が明治四五（一九一二）年に神

▲写真③　旭東尋常小学校附属幼稚園保育室内部

戸幼稚園で導入され、それに対して倉橋惣三が同年十二月発行の『婦人と子ども』において推奨のことばを述べたことは前述した。ここで加えなければならないことは、倉橋が同誌上で更に改善できる点を二点あげていたことである。すなわち倉橋は半円形の机ではなく、それを扇形机（四分の一の分割机）にしたり、中央を丸くくりぬいたりするくふうが期待されると述べた。大正五年に旭東尋常小学校附属幼稚園で使用されていた扇形机は、まさにその四年前に発表された倉橋の提言を、実践に移した机だったのであった。旭東尋常小学校附属幼稚園の保姆たちが何を参考にして、どのような経緯で扇形机を導入したのかは明らかではない。しかし倉橋が推奨した扇形机が岡山県下の幼稚園で早々と実際に使用されるに至ったことは、当時の地方の保姆たちの教育に対する熱心な姿勢を示しているといえよう。

最後にこの新しい形状の机を導入した結果、保育室内の空間や、幼児同士の距離・向きなどはどのように変化したかという点を考えてみよう。次に示す図⑥は、写真



図⑥　旭東尋常小学校附属幼稚園保育室内配置図

③の室内の机椅子の配置と幼児の位置を示したものである。机の寸法は前述の神戸市立神戸幼稚園の大円形机の寸法（『婦人と子ども』第12巻第12号・明治四五年十二月発行に記載されている）を参考にした。椅子の数は、机に収められている椅子の数も加えてあるため、写真の幼児の数よりも多くなっている。

まず室内の採光について考えよう。この扇形机の導入を容易にし、その使用を効果的にしたひとつの要因は、この保育室の三方に窓があったことである。様々な方向を向いて座る幼児が生じる扇形机は、室の片側にのみ窓がある保育室では、採光の点で導入が難しい。今日のように照明で光度を完全に補うことができる時代と異なって、当時は円形・扇形机の導入の壁として採光の問題が存在していた。しかしこの旭東尋常小学校附属幼稚園の保育室は三方に窓があり、採光は充分だった。

次に室内の机の占める面積と、空きスペースとの関係を見る。この室内は室面積38・88㎡のうち机の占める面積は5・85㎡で、室面積の約15％である。この割合は、本考察第一回報告で示した図②における机の占有面積とほぼ同じである。それにもかかわらず扇形机を使用すると、保育室の出入口付近に14㎡少々の空間がとれ、且つ机の間隔も83・5㎝とれることが、図⑥に示されている。共用机は、限りある空間を効果的に使用するのに適した形であるといえる。

本考察の最終回となる次の第三回報告では、旭東尋常小学校附属幼稚園の遊戯室における実践を考察する。

＊本報告は、平成三年度修士論文の一部を加筆・修正したものである。

――つづく――

（東京大学大学院　博士課程在学
ゆかり文化幼稚園　非常勤講師）